

桜蔭俳話会 六月句会(第二七七回) 於桜蔭会館

平成二十一年六月二十八日

- 3点② 吾が生のしづかに速し夏の月 守
 3点 夏柳卓袱屋の跡のジャズの店 貞勝
 取り合へずといふ生ビール重ねけり 秀一
 2点① 汗を切る眼の先一点整備工 幸
 この星の濡れてしづかや濃紫陽花 守
 2点 黄と黒の空気が動く夏の蝶 佳史
 江戸言葉ここぞ生きてる鬼灯市 幸
 1点① 友の忌や卓に集めしねぢれ花 与史
 万緑の故郷変らず私に近く 文枝
 耳門より四葩の海に溺れけり 貞勝
 1点 門衛の目札やさし夏椿 秀一
 心音の一つ弾みし青嵐 守
 年古りて恋に恋せりアマリリス 幸枝
 音もなく虫の死体へ蟻いそぐ ヤエ子
 赤シャツの卒寿個展や遠青嶺 幸
 還らざり薔薇のアーチを出て往きて 貞勝
 母と娘のたまの出会い梅雨の宿 文枝
 蟹ゆくや開港百五十年史 守
 年々に馴染み来りぬ夏帽子 幸枝
 髪切つて五月の風に吹かれけり ヤエ子
 へぼ胡瓜ばかり育てて路地住まひ 与史
 一切を流して梅雨の暗渠かな 守
 たそがれに十葉十字の花の白 佳史
 紫陽花や遙かの海を樽にし 幸枝
 時の日やかぐやは月にもどりたる 与史
 ※ 南天の花とぼるるや雨催ひ 幸枝
 万緑の中にわが身のおきどころ 文枝
 浜の夏クレオパトラの香りかな ヤエ子
 夏来たる大棧橋にクルーズ船 与史

- 一杯の水割りに夏の夕明り 溪水
 久し振り母と娘と五月闇 幸枝
 時の日や携帯電話つながらず 秀一
 ファイナルの同期会なり梅雨おして 与史
 餌を欲しく重なり流るる夏の鯉 佳史
 万緑や曾孫の言葉五つ六つ 溪水
 玻璃窓を激しく打つや走り梅雨 幸枝
 子等の声天まで届くか梅雨晴れ間 ヤエ子
 書いて消し駄句持て余す梅雨しぐれ 幸
 六月の花のむらさき雨を恋ふ 秀一
 大地掴むロボットの蜘蛛水を撒く 貞勝
 銭亀はゼンマイ仕掛に似て泳ぐ 佳史
 翡翠や仲々逢へぬ池通ひ 溪水
 笹団子梅雨の知らせと共に着き 文枝
 鎌研ぎて刃先をなぞる午前五時 幸
 夏草のどの名も知らず鉄路錆ぶ 秀一
 ソフトクリームマッシャーホルンに似て響ゆ 貞勝
 玫瑰や太平洋のうねり継ぐ 溪水
 生垣は九十度角に刈り込まれ ヤエ子
 シーバスのさんざ波立て大南風 佳史
 鬼灯や曾孫待たるる昨日今日 溪水

不在投句・秋山佳史、野上貞勝、平井与史